

形態については、いずれも頭部が山型に浅く尖り、下部が平らになる塔婆状を呈するものと思われる。(10)は完存、(1)(4)(6)(7)もほぼ完存に近い状態と思われる。(1)(4)(5)(7)(8)は頭部の一部が欠損している。(2)(5)(8)(9)は下部が欠失しており、(3)は下部の一部が欠損している。(6)(9)は側部の一部が欠損、(6)は中央部の一部も欠損している。

なお、整理途中のため、今回報告したものは、保存処理を施した柿経の一部のみである。

また、経文以外の書写の経緯などに関わる記述は、未報告のものも含め、現時点では確認されていない。

9 関係文献

行田市教育委員会・行田市郷土博物館『第六回テーマ展 最新出土品展―平成四～六年度の発掘調査の成果―』(一九九五年)

行田市教育委員会『行田市文化財年報 平成六年度』(一九九六年)

同『行田市文化財年報 平成七年度』(一九九七年)

(中島洋一)

平安時代の俵の札のはなし

江戸末期の西田直養の随筆『笹舎漫筆』(『日本随筆大成』第二期)に、次のような話が記されている。

先年江戸にて猪飼正穀より、寛治年中の米一撮を得たり。是玉川のさにと、五郎左衛門といふ大農のありけるが、その庫おほきがなかに、ひとついにしへより開かぬ庫あり。いにし年それをひらきけるに、内にもみ俵おほくこめたり。その俵をひらきみしに、木札ありて寛治元年といふ文字ありしとぞ。それより、公に申上、また元の如くして、その米を世に出さずと也。その米を試に田舎人にとらせまかしめしけるに、生出て苗代となり、つひに八束穂の稲とはなりぬ。普通の稲に比れば、額をますこと尤おほし。七百年の米を再び土に生ぜしむること奇なるわざなりかし。とにかくに米をばもみにて儲べきことなり。

豪農の庫の俵から、寛治元年(一〇八七)と書かれた札が見付かったという。真偽不明ながら古くに俵中に札を納める場合があったことを窺わせる話のように思う。また内容物を記した札を外面に縛り付けた近世の俵が、北上市立博物館に展示されている。一目で中身のわかる後者の方が一般的、実用的であろう。では前者の札はどのような機能を果たしたのだろうか。(鈴木景二)